

## 2. 寄稿：私のキャリア形成 ～景観計画を考え続けて～

恵良隆二（公財）横浜市芸術文化振興財団 専務理事（元三菱地所株）

三菱地所株でのプランナー人生（1974/4～2016/3）は、次の3つに集約できそうです。

- ① 横浜みなとみらい21計画と横浜ランドマークタワー開発（1993/7、オープン）
- ② 丸ビル建替え（2002/9、オープン）と丸の内再構築計画
- ③ 三菱一号館美術館の企画・開発・運営（2010/4、オープン）

2002年9月、丸ビル建替えのオープンの日、「これを契機に社会との関係に重心を移した計画づくりに務めよう」と考えていました。それは入社時の初心に回帰する想いです。「人間と自然とのかかわりを生態系の立場から考えてきました」と社内報の新人紹介欄に記したコメントは、社会で生きる自分への意志表明でした。

横浜郊外の里山の団地で育ち、大学では地理学と生態学を踏まえた地域計画論を志して緑地学の分野に進学しました。しかし、「人の営為と自然のバランスを図る景観計画論」では学位取得は無理とのこと。建設省都市局で2か月半のアルバイトをしたものの、自分の居場所は見つかりません。国家公務員上級試験に合格しての辞退をけじめとして、三菱地所株で働き始めました。Going my way? 若かったと思います。

入社後の7～8年は住宅地、ゴルフ場、都市開発の設計と環境調査に取り組みながら、景観生態学の方法論を試していました。30歳前後から横浜みなとみらい21事業との関わりが強まり、マスタープランや街づくりルールの議論を深めるうちに、横浜ランドマークタワーの開発企画・行政協議を担当していきました。着工の頃（1990年春）のハード系の専門家との協働に、文化や街づくり分野の方々との交流が加わりました。



写真1 横浜ランドマークタワー



写真2 みなとみらいの街と横浜ジャズ祭

阪神・淡路大震災（1995年1月）の翌年4月、「丸ビル建替えと丸の内再構築」が新たなミッションとなりました。それまでに培った経験で構築した基本姿勢を崩すことなく丸ビル竣工を迎えました。その後、将来の丸の内への道筋を具体化する街ブランドの形成に取り組みました。その内容は、①街ブランド・マネジメント、②ビジネスサポート＆ワーカーの生活支援、③ビジネスインキュベーション、④公共空間の活用を促進する街イベントの展開です。これに、⑤三菱一号館美術館の開設が加わりました。



写真3 建替え後の丸ビルと新丸ビル



写真4 三菱一号館美術館全景

美術館開設（2010年）の翌年で60歳、その後は行政や大学への協力を中心に5年間を勤めた後、2016年4月から現在の勤務先で働いています。三菱地所(株)での活動を振り返ると、①常に未知のプロジェクトに出会えたこと、②多彩な専門家との交流から多くの刺激を受けたこと、③忙しい中でも読書と文化的体験を欠かさなかったことの3つが、今の活動の支えとなったと実感しています。現在の芸術文化の振興やアーティスト・クリエイターとの協働による社会課題の解決や街づくり活動の支えとなっています。

50歳前後から、社会との関係を重視したことが、その後の仕事人生を豊かにしてくれました。今は、財団の活動を通して文化や芸術が社会基盤と認知される努力を続けています。しかし、初心であった環境保全と景観計画論が道半ばです。これまで経験した文化芸術面の経験を加味して地域の景観を読み解くことで私の景観計画論は一つの目途が着くでしょう。過去の再現は困難です。現在と向き合い続ける計画論です。

2027年、横浜で国際園芸博覧会「GREEN×EXPO 2027」が横浜の里山エリアで開かれます。私が幼少期から25年間暮らしたエリアです。50年のキャリアを経た私の眼には、どの様な風景が映り込むのでしょうか。子ども心を取り戻す途上であろう私にも心地良いものであって欲しいと願っています。どうやら、少しの未練はあるようです。

江戸の文人・売茶翁の言と伝わる「茶代は二千両から半文まで、ただでもよいが、ただより安くは出来ません。」の心持で、社会と関わるキャリア人生は続くのでしょうか。